「お嬢ちゃぁん。俺たちとイイことしないかぁい？」
ひとり取り残されたディルに、執拗に迫る不良(チンピラ)三人組！
しかし、それは‥‥

「‥‥今日ほど、姉さんの悪知恵が憎らしいと思ったことはないわ」

狙い通り、わざと簡単なトラブルを起こさせ、階上へ舞い戻ったマーニャ。啖呵と魔法で不良(チンピラ)を圧倒する！
「あたしはこうやって生きてるんだ。あんたみたいな、自分の力で生きてないやつとは違うんだよ、チンピラ！」

そこへ現われた大親分(ゴッドファーザー) ドン・ジョバンニ。彼は部下の非礼を詫びると、かつて見たマーニャの舞踏(ダンス)を再び見たいと頼むのだった。
ミネアの弾く洋琴(ギターラ)を伴奏に舞うマーニャ。彼女の人生そのものの舞踏(ダンス)に、ディルは涙するのであった。
「見えたかい？ あたしの中の炎」

ドラゴンクエスト４移植記念二次創作小説

「私の中の炎」

～エニックス「ドラゴンクエスト４・導かれし者たち」第５章より～

最終話　「イヤな物はイヤなの！」

あさづけ兄貴

「いや～、酔っぱらった酔っぱらった‥‥ははは～」
「大丈夫ですか？ マーニャさん‥‥」
「ほら、姉さん、まっすぐ歩きなさい！」

ディルとミネア、二人に両側から肩を抱えられるように、それでもふらふらと千鳥足で、マーニャは宿への帰り道を歩いていた。

あの舞踏(ダンス)の後、酒場では、盛大な宴会‥‥というよりは「酒盛り」と言った方がしっくり来るような、そんな催し物が行われていたのであった。

とにかく、凄まじい人数。
そして、凄まじい酒量である。

そこにいた人々は、みな、飲み、語り、笑い、
そして、その日の主役だった人物に、酒を勧める。
口々に、感謝と感動を表しながら。

そして、その主役は、あくまで陽気に、それを拒まず飲み続け‥‥

故に今、こうして、ディルとミネアに肩を抱えられ、大通りをふらふらと歩いているのであった。

「ううう‥‥さすがに飲み過ぎたわ」
「当たり前よ！　どれだけ飲んだと思ってるの！」
「‥‥あれだけのお酒、一体どこに入っちゃったんですか？」
「あ〜〜！！ダメ、お腹触んないでディル！　吐いちゃうから！」
そう言って、マーニャはその場にへたり込んでしまった‥‥。

あの舞踏(ダンス)を見た者なら、すっかり幻滅してしまいかねない、この体たらく。
しかし、これもまた、マーニャのひとつの真実であり、そして、これもまた、マーニャの魅力のひとつなのだ。
‥‥信じられないかも知れないが。

そして。
信じられないかも知れないが、もうひとつの真実として、今のような状態こそが都合がいい、と考える者がいた。
そう‥‥都合が良かったのだ。
彼らの復讐(リヴェンジ)のためには。

＊

「へへへへへ‥‥いいザマじゃねぇか」
「！？」

暗闇から無遠慮に投げかけられたその声に、その場にしゃがみ込んでいた三人‥‥酔っているはずのマーニャも、ミネアも、そしてディルも、とっさに反応した。
声がした方向を、じっと睨む。

「さっきの恨み、晴らさせてもらうぜ」

そう言いながら、男が一人、続いて二人、暗闇からこちらに進み出てきた。

忘れるはずもない。
あの男たちだった。
ディルにからみ、マーニャに額を焼かれた、逆立ち金髪の男。
知らぬ間に、ミネアに＜眠り(ラリ)の呪文(ホーン)＞で眠らされた、モヒカンの男とヒゲ面の男。

みな、凄まじい、相手を射るような眼光だった。
先程とは全然違う。

金髪の男が、血に飢えた獣を思わせる、凄惨な笑みを浮かべた。
自分の額を指差す。
赤い、火傷の跡。
「こいつのな」

「ったく‥‥しつこいわねぇ！」
やや呂律の回らぬしゃべり方で、マーニャが怒鳴る。
だが、金髪の男は動じることなく、懐からナイフを抜いた。
「俺は恨みは忘れねぇんだよ‥‥最初にあのガキをいたぶってやろうと思ったが、
　てめぇがそんな状態ならビビる事もねぇ。遠慮なくやらせてもらうぜ」
言うと、下品な表情で舌なめずりする。

「あくまで強いやつとは戦わない、弱いやつを面白おかしくいたぶろうってわけね‥‥
　心底クズだね、チンピラ共！」
「今のうちに吠えておけ。どうせすぐ吠えられなくなるんだからな」

金髪の男が言うと、それにつられるように、他の二人も笑い出した。

マーニャが小声で呟く。

「ちっ‥‥このマーニャさんともあろう者が、ちょっと読みが浅かったなぁ‥‥」
「そう毎度毎度カッコ良くも行かないってことね、姉さん」
「しょうがないね‥‥ここは任せた」
「じゃあ、ひとつ貸しね」

姉妹が、こそこそ、とそんな会話をしていた時のことである。
彼女達の横から、すっと抜け出す者がいた。
「！」
「ディル！」

緑色の髪を持つ、小柄なその少女は、姉妹の前に立つと、三人組をじっと見据え、大きく両手を広げて―――はっきりと、言った。

「近づかないで！」

＊

「おっ？」
金髪の男は、一瞬、驚きの表情を浮かべた。だが、すぐに、元の歪んだ目つきに戻った。
「ガキィ‥‥」
完全に、ディルを見下した態度だった。
「てめぇ、あの女より先に自分が痛い目に会いてぇってか？ ええ？ 怖くないの
かよ！」
凄んでみせる。

が‥‥
ディルは、目をそらさず‥‥しかし、こう言った。

「怖いわ」

「あぁ？」
「怖いわ。すごく怖い。今すぐここから逃げ出したいぐらい‥‥泣き出したいぐらい、
それぐらい怖い」

明らかに、言っていることとやっていることが違う。
そう思った三人組は、ただ、狐につままれたような顔で、ディルの言葉を聞いていた。

「でも‥‥マーニャさんが教えてくれたの。『どんなに怖くたって、イヤな物はイヤだ、
　って言わなきゃダメだ』って。そうしなきゃ分かってもらえないって」
「‥‥？」
「だから‥‥私‥‥」

　そこで、ほんの一瞬間を置いてから‥‥ディルは、心の奥底に眠っていたものを一気に吐き出すように、大声で叫んだ！

「イヤな物はイヤなの！　あなたたちがイヤ！　すごくイヤ！
だから‥‥近づかないでっ！」

「ディル‥‥！」
「あの子‥‥化けた‥‥！」
ミネア、そしてマーニャの顔に、喜びと驚きの表情が浮かぶ。
「マーニャさんが教えてくれたの‥‥ですって、姉さん」
「踊って見せた甲斐があったってものね。優秀優秀」

＊

「へ‥‥へへへ‥‥へへへへ‥‥」
冷や汗を流しながら、金髪の男が笑った。
「言ってくれるじゃねぇか、ガキ！」
そのまま前に進むと、ディルと目と鼻の先の距離で対峙する。

‥‥と、その瞬間、
「どけ！」
男は、ディルを強く横に突き飛ばした！

「あうっ！」
吹き飛び、倒れるディル！
「ディルっ！」
姉妹が同時に叫ぶ。

「あぁ？ 人の心配している暇あるのか、女炎術士（ファイア・ソーサレス）さんよぉ？」
不愉快そうな顔で、金髪の男が言う。
「もうすぐ、自分がボコボコにされようって時によぉ！」

＊

倒れたディルは、自分の上体を起こそうとして‥‥ふと、自分のそばに落ちているものを目に留めた。
それは、長さ数十センチはある、太い木の枝だった。

ディルは、ミネアと出逢う前、泣きながら大通りを歩いていた時のことを思い出した。

自分の前を、楽しそうに、子供たちが駆けていった。
そのうちの一人は、手に、剣に見立てた木の枝を持っていた‥‥。

「よしっ‥‥！」
ディルは、その枝を、迷わず手に取った。

＊

怒鳴った男に、しかしマーニャは、男を睨み返して言った。
「あんたこそ、自分の心配したら？」
「何っ？」
「そうやって、弱い者を叩いている限り、そうやって他人の力で生きている限り、
　あんたは絶対に勝てない。あたしにも、そして‥‥」
マーニャが、彼女の斜め前方‥‥男たちの横を、顎で指す。
「あの子にもね」

男たちの視線の先では、ディルがゆっくりと、起き上がった。
二本の足を肩幅に開き、木の枝を持つ右手に左手を添え‥‥正眼の構えを取る。
目はまっすぐに、男たちを見据えていた。
戦う女の目だった。

「ちっ、ガキが‥‥」
舌打ちすると、金髪の男はディルの方に向き直った。
「おとなしく寝てりゃいいものを‥‥てめぇ、そんなに痛い目に遭いたいか、ガキ！」

怖いはずだった。
先ほどの‥‥あの酒場でからんだ時のディルならば、何もできないはずだった。

しかし、今のディルの心には、宿っていたのだ。
自分の力で生きられる、自分の想いを世に問える‥‥
燃えて、辺りを照らし、敵を焼き尽くす‥‥
マーニャ譲りの、赤く熱い炎が！

「‥‥ガキじゃない」
木の枝を構えたまま、うつむいて‥‥ぼそっと、ディルが答えた。
「何っ！」

「私は、『ガキ』じゃない‥‥」
「何だとっ!? てめぇ、何を言って‥‥」
「私には、名前がある。私が背負った名前が‥‥マーニャさんやミネアさんと同じ、
　自分が生きていくための名前が。あなたたちとは違うわ！」
「てめぇ‥‥！」

そして、ディルは、顔を上げ、男たちを見据え、ついに名乗った！

「私は＜勇者＞ディラジーナ‥‥『竜の娘』っ！」

＊

「ディル‥‥！」
「さっき、酒場で言ってた‥‥」
「ああ、育ての親御さんに聞いたって言う、あの子の本当の名前‥‥」
「言えたのね、ついに‥‥本当の自分の名前を。受け入れたのね」
「あたしたちの目の前で、どんどん成長してる。まったく、とんでもない子だねぇ」

マーニャが、喜びの笑顔とも苦笑ともとれる、複雑な微笑みを浮かべながら言った。
「さあ、見せてもらうよ＜竜の娘（ディラジーナ）＞‥‥本当のあんたを！」

＊

「勇者ぁ？『竜の娘』ぇ？」
金髪の男が、あからさまに馬鹿にした目つきで言う。
「なんのゴッコ遊びかは知らねぇが‥‥そんな棒っ切れで俺達に勝とうだって？
　寝ぼけてるんじゃねぇのか？ へへへへへへへ‥‥」
男の言葉に、モヒカンとヒゲ面の二人も笑う。
「ひゃっひゃっひゃっ‥‥」
「ぐふふふふ‥‥」

しかし、ディルは、全く動じる様子もなく、木の枝を剣のごとく構え続ける。
その目つきが‥‥戦おうとするその目つきが、金髪の男は気に入らなかった。

「あくまで、その棒っ切れで俺達と戦おうっていうのか！ てめぇみたいなガキが！
　酒場でも言ったろうが！ 騒ごうが、棒っ切れを振り回そうが、てめぇに出来ること
　なんか何もありゃしねぇんだよ！」
怒鳴る男。だが‥‥

「あるわ」

ディルは、構えを変えぬまま、静かに言った。
「あるのよ。私に出来ることが‥‥私にしか出来ないことが。思い出したの」

「ディル‥‥？」
マーニャも、ミネアも、その言葉の真意を測りかねていた。

「くっ‥‥どこまでもむかつくガキだ！」
男は歯ぎしりすると、余裕のなさそうな口調で、二人の手下に命じた。
「おいお前ら、このガキを畳んじまえ！」

「ひゃっひゃっひゃっ‥‥」
モヒカンの男が、両手に持ったジャックナイフを、パチンと鳴らした。
手の中で、引き出された刃が冷たい光を放つ。

「ぐふふふふ‥‥」
ヒゲ面の男が、腰に巻いていた鎖をほどき、両手に持った。
じゃらっ、じゃらっ、と、重そうな音をたてた。

二人は、じりじりとディルとの距離を詰めると‥‥一気に走り出した！

「ひゃはぁ！」
「ぐおおうっ！」

ジャックナイフと鎖が、ディルを襲う！

その時――
何が起こったか、一瞬、金髪の男にも、ミネアにも、分からなかった。

ディルを襲うモヒカンの男とヒゲ面の男が、彼女を視界から隠したその一瞬‥‥

男たちの陰で、ぽっ、ぽっ、と二度、橙色（オレンジ）の光がまたたいた。
と同時に、男たちが、
「ぐわっ！」
「うおっ!?」
と、小さく悲鳴を上げた。
さらに、それと同時に、
「！」
マーニャが、びくっ、と体を震わせた。

そして、次の瞬間‥‥
ドッ、ドッ、という鈍い音とともに、二人の男のわき腹に、ディルの構えた枝がめり込むのが見え‥‥
男たちはそのまま、それぞれ左右に吹き飛ばされ、倒れたのだ！

ようやく姿が見えたディルは、横に薙いだ格好の枝を、再び正面に構え直すと、残った最後の敵‥‥金髪の男を、変わらぬ眼光で睨む。

「姉さん？」
様子のおかしい姉を、ミネアが心配そうに見る。
「どうしたの？」
「今‥‥『炎の精』が動いた‥‥」
「えっ？」

炎術士（ファイア・ソーサラー）は、大気中の「燃える力を持つもの」――これを彼らは、親しみと畏怖をこめて「炎の精」と呼んでいた――を自在にコントロールすることで、「魔法」を行う。
「炎の精」を球状にして相手に投げつける「メラ」。
「炎の精」を線状に配列・移動させることで、広範囲の炎の帯を作り出す「ギラ」。
「炎の精」を一点に圧縮し、一気に解放することで大爆発を産み出す「イオ」。
この三つが、炎術士（ファイア・ソーサラー）の全ての魔法の基礎となる。
マーニャはもちろん、これら三つを使いこなす。そしてディルも、メラならば使えるはずであった。

「じゃあ、ディルが炎の呪文を？ ····あの橙色（オレンジ）の光は····」
「でも、ディルは、枝を振るってあいつらを倒した。あれは『剣術』だよ」
「あ、そういえば····」

炎術士（ファイア・ソーサラー）····いや、一般に魔術士（ソーサラー）はすべからく、呪文を使いつつ武器を持って戦う、という事ができない。
それは、彼らが剣術の修練よりも魔法の鍛錬に興味を持つから、つまり、根本的にうまく武器を使えないからでもあるが、それ以上に大きな理由があるのだ。
「剣と魔法は相性が悪い」。
剣技を鍛えれば、魔力は成長しないのである。その逆もまた然り。

マーニャを迎えに宿屋に戻る途中、ミネアがディルに話したこと····炎の呪文と氷の呪文は相性が悪い。
それと同様に、その「魔法」自体と、剣技もまた、相性が悪い。
魔法とは、それほどデリケートな物なのであった。

「酒場でディルは言ってたよね。剣を習った先生とか、魔法を習ったお爺ちゃん、とか」
「ええ。つまりディルは、その両方の訓練を受けている、ってことよね」
「ミネア····あたしたちは今、とんでもない物を見たのかも知れないよ」
「····」

「な、何だ！ てめぇ、今何をやった！」
上ずった声で、金髪の男が叫ぶ。
明らかに、彼は動揺していた。
小柄な少女一人と屈強な男二人····状況的に、どう考えてもこちらが有利であったにもかかわらず、地に伏しているのは男二人。

「こんなはずが‥‥こんなはずがあるかぁ！」
叫ぶと、男はナイフを構え、ディルに向けて走り出した！

＊

こちらに向かってくる男を見ながら、ディルは、自らの覚え習ったことを‥‥思い出を反芻していた。

『良いかディル。今からわしら二人が、お前にとっておきの技を教えるぞい』
あの村の広場で、魔法使いの老人が言う。
続いて、その横に立っていた男が言った。ディルに剣術を教えていた男だ。
『お前にしか出来ない、お前だけの技‥‥その基礎の基礎だ』

「おああああああっ！」
金髪の男が突進してくる！

『まず、両手で剣を構え、動かさない。左手はギリギリまで剣を握ったまま‥‥
早く離し過ぎると、こちらの意図を見抜かれる』
『はい！』
『そのまま、まずは相手の攻撃をよく見てかわすのぢゃ。そして相手の隙を
うかがい、チャンスを待つのぢゃ』

ビュン！
ナイフでディルを横薙ぎにしようとする金髪の男！ だが、ディルは、上体を後ろに反らし、それをかわす。
ビュン！ ビュン！
続けざまの攻撃を引きつけ、軽やかにかわし続ける。
「くそぉ、ちょこまかと！」
焦った金髪の男が、大上段から力任せにナイフを振り下ろした！

『チャンスは、相手が上段から大振りで攻撃した時だ』
『相手が振りかぶった瞬間に、左手を下ろし、そこに魔力を集中するのぢゃ』
『はい‥‥』
『そして、顔面に、それをぶち込む！』

そう、その教えの通り、ディルは叫んだ！

「メラっ！」

ヴァオッ！
ディルの左手から発せられた火の玉が、男の顔面を直撃した！
「ぐおおおおっ!?」

「！」
マーニャが、身を乗り出す。

『これで相手の体勢が崩れる。大きな隙が出来るのじゃ』
『あとは、基本通りだ。その隙に、剣で一撃を叩き込め！』

両手で顔面を押さえた男の、がら空きになった鳩尾（みぞおち）めがけ、ディルは、両手で握り直した枝を、渾身の力で振り抜いた！
「うおおおおおっ！」

ドゴオオオン！
「うぐ‥‥お‥‥」
金髪の男は、がくっと、その場に膝をついた。
そのまま、どさっ、と、上体も前に崩れ落ちる。

マーニャも、ミネアも、息をするのを忘れ、それを見ていた

「‥‥やっぱり、あたしの思った通りだ。とんでもないよ」
「剣と魔法の‥‥複合攻撃‥‥。あんなことが、可能なの‥‥？」
「あたしには出来ないね‥‥。いや、普通は誰にも出来ないよ、あんなこと」
「それじゃ‥‥あの子は、一体‥‥」

＊

うつ伏せに倒れた金髪の男を見下ろすディル。
木の枝から左手を離し、ゆっくりと両手を下ろす。
そして、目を閉じ、「ふぅ‥‥」と、溜め息をひとつつくと、姉妹の方を見て、にこっ、と笑った。

そして、それが命取りだった。

ガッ！
ディルの左足首を、何かがつかんだ！
「！」

地に伏したままの、金髪の男の右手の指が、ディルの足首に食い込んでいた。

「‥‥ねぇ‥‥さねぇ‥‥」
何かに取り憑かれたように、金髪の男が繰り返し呟く。
「許さねぇ‥‥許さねぇ‥‥許さねぇ‥‥」

「くっ！」
ディルが、左手に、再び魔力の火球を形作る。男の手にぶつけ、指を離させるつもりだったのだ。
だが‥‥！

「許さねえぇぇぇぇっっ!!!!」
火球が放たれるより一瞬早く、絶叫と共に、男がディルの足首を力の限り引っ張った！
「きゃあっ！」
バランスを崩し、倒れるディル！
火球が、あさっての方向に飛んでゆく！

そのまま、男はディルに馬乗りになった！

その表情！
マーニャに焼かれた額と、ディルのメラが焼いた右の頬。
見開かれ、血走った目。
口元からは、涎が垂れている。
もはや、理性などは微塵も感じられない。
本能、あるいは狂気！

「許さねぇ‥‥許さねぇ‥‥許さねぇ‥‥！」
うわごとのように呟き続ける。

いつの間にか、モヒカンの男とヒゲ面の男も起き上がっていた。

ディルのそばに歩み寄ると、両側から、ディルの腕を押さえつける。

「へへ‥‥へへへへ‥‥許さねぇ‥‥許さねぇぞ、このガキ！」

ぱぁん！
男が、ディルの頬を一発張ったのだ！

「やばいっ！」
マーニャが叫ぶ！
「あの叩き方、下手したら鼓膜が逝っちまう！」

ぱぁん！ ぱぁん！
「許さねぇ‥‥てめぇら、俺の顔を！ ドンの名前でビビんねぇ！ てめぇら！」

「あの野郎‥‥」
マーニャが歯噛みする。かなり覚めているとはいえ、まだ魔法を放てるほどの精神集中は出来ないほどの酔いが残っていることを、マーニャは自覚していた。

その時である。
「‥‥醜いわ」
ぼそっと、ミネアが言うと、すっと、なにげなく立ち上がった。
手に持った提げ鞄（ポーチ）から、銀色の板のようなものを、３枚取り出す。
「ディルがどこまでやれるようになるのか見たかったから、我慢してたけど‥‥
もう限界だわ」
３枚を、右手の指の間に１枚ずつ挟むと、勢いよく斜め上に投げ上げる！
「あいつら、醜過ぎるもの」
言うと、ディルの方へ向けて、ゆっくり歩き出す。

「ミネア‥‥」
いつになく険しい表情のミネアに、マーニャも言葉を失っていた。

＊

ぱぁん！ ぱぁん！
ディルの両頬を、金髪の男が容赦なく張り続ける。
その両頬は赤く腫れ上がり、唇から血が一筋流れる。口の中を切ったのだろう。

ぱぁん！ ぱぁん！
「くそぉ！ 泣け！ 泣けよ！ わめけよ！ 負けを認めろよ！ 泣いて許しを乞えよ！
　逆らうなよ！ 這いつくばれよ！」
そう言って、手を休める。
「どうだよ！ 『許して下さい』って言えよ！ ええ？」

ディルは、目に涙を浮かべていた。
しかし、その瞳は、強い意思と輝きを宿し、男を見つめていた。
酒場で彼らにからまれていた時とは、全く違うものだった。

「私は‥‥負けない‥‥」
頬と口の中の傷の痛みに耐え、しかしはっきりと、ディルは言った。
「だって、私は自分で生きているから。負けたら私のせいになっちゃうから‥‥
　だから、私は負けないわ！」

これだけ圧倒的に不利な状況でも、マーニャの教えはしっかりと生きていた。
ディルの胸の炎は、消えていなかったのだ。

「て‥‥めぇ‥‥！」
野獣のような金髪の男の顔が、ますます狂暴な顔つきになる。
「その生意気な口、二度と利けなくしてやるぜ！」

そう言うと、男は、事もあろうに‥‥ディルの首に両手をかけた！
そのまま体重を両手に乗せ、ディルの気管と頚動脈を押しつぶそうとする！

「うぐっ‥‥」
ディルも、さすがに苦しそうにうめく。表情が歪む。
「そうだそうだ、その顔だよ！ 苦しめ！ 俺に逆らったことを後悔しろ！ へへへ‥‥」
嬉しそうにディルの首を締める金髪の男。両腕を押さえている二人も、笑っている。

「ぐ‥‥ぐぅっ‥‥」
ディルの顔色が赤味を失い、手足が小刻みに震え始める。
男が腕の力を緩める様子は微塵もない。
ディル、絶体絶命！

しかし、その時――
救いの女神が、舞い降りた！

＊

「ぐっ!?」
突如、男の顔が苦痛に歪み、首にかかる力と‥‥両手を押さえる力までもが同時に、一瞬緩んだ！

「！」
ディルはこの機を逃さなかった！
両手を抜き、首にかかった男の両手をつかんで横に広げ、首を自由にすると、両足で男の顎を思い切り蹴り上げる！
「ぐぶっ！」
そして、その勢いでそのまま後転。勢い余って尻餅をついたものの、ディルは見事に、死地からの脱出を果たしたのである。

「げほっ！　かはっ！」
激しく咳き込みながらも、急いで‥‥と言っても、最初はほとんど四本足で這うように、そしてよろけながら二本足で、ディルはその場から離れた。
「ディルっ！」
マーニャが手招きする、その方向へ、よたよたと走る。

どさっ！
マーニャの傍らに、やっとのことで倒れ込むディル。
「はぁっ‥‥はぁっ‥‥」
「大丈夫かい！」
「はぁっ‥‥マーニャさん‥‥私、負けなかった‥‥マーニャさんのおかげで‥‥」

ボロボロだった。
腫れ上がった顔。
唇の下には、乾いた血が一筋、
首には、手の跡がくっきりと残っていた。

こんな状態になっても、ディルは、負けなかった。
ディルは、自分の意志で戦い、そして、自分の意志で、敗北をはねのけたのだ。

マーニャは、ディルを抱きしめた。
「良く頑張った‥‥良く頑張ったね、ディル‥‥」

ディルは一瞬、マーニャの胸に顔を埋めるが‥‥突然、がばっと跳ね起きた！
「マーニャさん！　あいつらが！　あいつらがまた！」
「大丈夫、あとはあの娘に任せておけばいい」
「えっ？」
マーニャが優しい言葉で言った、その意味を理解するのに、やや時間が必要だった。
「！」
それに気がついたディルが、慌てて振り向くと、そこには‥‥

＊

ディルの見たのは、立ち尽くすあの三人。
なぜか、全員、右手の甲から血を流していた。

そして、彼らとディルたちの間に立つ、橙色（オレンジ）の背中‥‥。

ミネアだ。

ミネアは言った。
「姉さん、ディルをお願い‥‥本気でやるわ」
マーニャは、ただうなずいた。

「ミネアさん‥‥？」
「あいつらは、大きなミスを冒した」
真剣な顔で、マーニャが言う。
「ミネアを本気で怒らせた‥‥。あの子を本気で怒らせちゃいけないんだ。今度こそ、
　あいつらは、思い知ることになるよ」

呆然とした顔で、金髪の男は、自分の右手を見た。
右手に、銀色に光る、板のような物が突き刺さっていた。
それを引き抜き、よく見る。
そこには、笛を吹き鳴らす天使の絵と、「Judgement」と言う文字が書かれていた。

「＜審判（ジャッジメント）＞‥‥？　タロットカード‥‥？」

銀のタロット‥‥ミネアが武器として使う、特製のカード。
先ほど上空に投げたそれが、弧を描き、恐るべき精度で、三人の手に突き刺さっていたのである。

その視線は、目前に立つ女性に注がれていた。
あの踊り子に似た姿。
叡智と意思にあふれる瞳。

「兄貴、この女‥‥」
「分かってる。あいつらの片割れだろうが」
「そりゃそうなんですが、それよりも‥‥この女、評判の『占い師（フォーチュンテラー）』ですぜ」
「『占い師（フォーチュンテラー）』だとぉ？」

金髪の男は、もう一度、ミネアを睨んだ。
「ほお‥‥だが、今はそんなこたぁ関係ねぇ」
手に持った銀色のタロットを投げ捨て、ミネアにすごむ。
「どけ、『占い師（フォーチュンテラー）』。今度はてめぇがやられたいか？」

しかし、ミネアはそれに答えず、ただ、一言‥‥言った。
「醜いわね、あなたたち」

「な、何だとぉ！」
男たちが色めき立つ。
「だって、そうじゃない。女の子を男三人がかりで‥‥あまつさえ顔を腫れるまで殴るなんて‥‥しかも、自分の、いや、自分の物ですらない、借り物のちっぽけなプライドが傷つけられた、ただそれだけの理由で」

「てめぇ‥‥言わせておけば！」
男たちはそれぞれ、武器を抜いた。が、ミネアは動じない。
「あなたたちは思い知る必要があるわ‥‥自分たちがどれほど醜いかを。どれほどに醜い事をしたのかを」
変わらぬ口調で言うと、ミネアは、すっ、と右手を上げた。
と、その途端‥‥

「あ、兄貴‥‥」
「な‥‥なんだありゃ‥‥」

ミネアの足元の砂ぼこりが、ふわっ、と舞い上がった。
そのまま、ミネアの周りをぐるぐる回る。

「つむじ風‥‥だと‥‥？」

砂ぼこりを舞い上げた風は、ミネアにまとわりつくように、足元から、腰、胸、そして顔の周りを、渦を巻いて吹き続ける。

「ミネアさん‥‥」
つむじ風の中心に、右手を上げて立っているミネア。
神々しい姿だ、と、ディルは思った。

「て、てめぇ‥‥何のつもりだ！」
まったく予想外の物を見て、明らかに男たちは狼狽していた。

「言ったでしょう、あなたたちに醜さを思い知らせてあげる、って‥‥」
そう言うと、ミネアは手をゆっくりと下ろし、男たちを指差し、叫んだ！
「バギ！」

ビシュオッ！
ミネアを取り巻くつむじ風から、三条の風が駆けた。
それが男たちのところに到達すると同時に、彼らの頬の皮膚が線状に弾け、血がしぶく！
「ぐわあっ!?」

「！」
「『バギ』‥‥ミネアの風の呪文」
「え？」

驚いたディルに、マーニャが更に説明を加えた。
「あたしが『炎』を使えるのと同じで、あの娘も『風』を使える。風を走らせて、
　岩だろうが鉄だろうが、何でも切り裂いてしまう‥‥それがあの娘の呪文さ」

「ミネアさんも‥‥女魔術士（ソーサレス）‥‥」

「なんだい、聞いてなかったのかい？」
「は、はい」
「あの娘、あたしのことはきちんと説明したくせして、自分のことは言わなかったのかい‥‥まったく、ずるいったらありゃしないね」
ちょっとだけ愚痴ると、マーニャはまたミネアを見やり、言った。
「でも、見てれば分かる。あの娘の力は」

ヴァシュッ！
再び、三人の顔面から、赤い血が吹き出す！

「分かんねぇ！　何が‥‥一体何が！」
「痛ぇ！　痛ぇよ兄貴！」

手下二人の悲鳴を聞きながら、金髪の男は考えていた。
何かは分からない。ただ、原因は明らかだ。
あの女のつむじ風。それしかない。
だから、あの女を倒せば‥‥
ごく単純だが、それゆえに、正しい結論だった。

「占い師（フォーチュンテラー）を！　あの女をぶっ殺せ！」
号令一閃、自らナイフを抜き、ミネアに突進する。手下もそれに続いた。
しかし‥‥

「ハッ！」
ミネアが手を動かす。それにつれ、三人の手元を風が通り過ぎた。
バキィン！
一瞬で、風が三本のナイフの刃を折り、鎖を寸断した！
「何っ！」

「無駄よ。あなたたちに出来ることは何ひとつないのだから」

わざと冷たく、ミネアは言い放った。
風はいまだ、彼らの頬を切り裂き続けていた。

「そして、あなたたちはディルの自由を奪い、力任せに傷つけた‥‥こんな風に」

言って、ミネアが両手を天に上げたその瞬間‥‥
風が荒れ狂った！

＊

ビュオオオッ！
今までと比べ物にならない、圧倒的な風が‥‥そして真空の刃が、三人を襲う！
服が寸断され、頬に、額に、肩に、腕に、無数の傷が生じる！
「ぐおおおおおっ!?」

「うわっ‥‥！」
思わずディルが声が上げるほどの、凄絶な光景‥‥に見えた。
「大丈夫だよディル、あれは凄そうに見えるだけさ」
「え？」
「バギの呪文自体のダメージはたかが知れてる。せいぜい、二、三日で治るぐらいの切り傷がやっとさ」
「じゃあ‥‥」
「あの娘の怖さは、それっぽっちの呪文を、あれだけ大げさな物に見せる事ができる、って事。どうすれば相手が怖がるか、それを知ってる‥‥要するにハッタリさ」
「‥‥」
「あの娘の商売‥‥占い師（フォーチュンテラー）って商売は、相手の心の動きを読むのが仕事だから‥‥それを最大限に活かしてる、ってわけ」
「それじゃ‥‥」
「そう。あれは、あいつらに『恐怖を与える』ことが目的‥‥それがあの娘の狙いさ」

＊

吹き荒れる嵐が、彼らを容赦なく襲う！
「痛ぇ！痛ぇよお！」
「兄貴ぃー！」
手下二人が、悲鳴を上げる。
体に、絶え間ない痛みが走る。

金髪の男は、生まれて初めて、心の底から恐怖を味わっていた。
「な、な、な‥‥」

風に乗せ、ミネアの言葉が、四方から聞こえてくる。
＜泣きなさい‥‥わめきなさい‥‥＞
＜負けを認めなさい‥‥泣いて許しを乞いなさい‥‥＞
＜逆らうことは許しません‥‥這いつくばりなさい‥‥＞
＜『許して下さい』と言いなさい‥‥＞

「うおおおおお！」
「やめろ！　やめてくれぇっ！」
「いやだ！　いやだ！　いやだぁっ！」

服と体（のほんの表面）を切り刻まれながら、恐怖に顔を引きつらせ、彼らは叫んだ。
もはや、論理的な事は何ひとつ言えなかった。
心の底から来る恐怖の叫び、それしか口に出す事ができなかった。

「‥‥あれは、全部私が言われたこと‥‥」
ディルが、その光景を見ながら、ぼそっと呟いた。
「そう、あれは全部、あんたがあいつに言われたこと。体の自由を奪われ、頬を
　叩かれながら‥‥。その怖さをそのまま、ミネアはあいつらに味あわせてるのさ」

「う、うわあああああっ！」
金髪の男が、後ろを向き、走り出した。
もはや逃げるしかない。彼の理性ではなく本能が、それを感じていた。
「あああああっ！」
顔中を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしながら、彼は、そして手下の二人も、走ってその場を後にしようとした。

‥‥が、しかし。

シュバアアッ！
彼らの鼻先を、何かが横向きに駆け抜けた！
土埃が上がる！

それもまた、風だった。
風が‥‥風の起こす真空の波が、彼らの目の前を駆けたのだ。
「ヒイッ！」
三人が足を止める。

その間にも、嵐は彼らを切り刻む。

「どこへ行こうというの？」
風に乗り、ミネアの声が聞こえる。
「まさか、私から逃げるつもりではないでしょうね？」

これも、金髪の男が酒場でディルに言った言葉であるが、これは偶然の一致である。
だが、これが決定打となった。

逆らうことも、逃げることもできない。
何ひとつ、出来ることはない。
そのまま、黙って風に切り刻まれるだけ。

この瞬間、彼らの心に、くっきりと、敗北と恐怖とが刻み込まれたのである。

へなへなと、その場にへたり込む三人。

目には、全く生気がない。
髪の毛が、真っ白になっていた。

＊

やがて、嵐は弱くなっていき‥‥
ミネアの周りに渦巻くつむじ風も、少しずつ弱くなり‥‥収まった。

「ふぅ‥‥」
ミネアは、両手を下ろすと、溜め息をついた。
「ちょっと、やり過ぎちゃったかしらね」
言うと、ディルとマーニャの方へ、ゆっくり歩いていく。

「ディル、立てる？」
ミネアが、あの天使の微笑みで、ディルに言った。
さっきまでとは全然違う、ディルの知る、優しいミネアだった。

差し出されたミネアの手を握り、立ち上がるディル。

ミネアは、ディルの顔を、優しくひと撫でした。
「こんなになるまで‥‥頑張ったのね‥‥」
涙ぐむ。
「待って、今治してあげるわ」
「え？」
両手でディルの頬を挟み、微笑んで一言。
「ベホイミ」

ミネアの両手が、柔らかい光を発した。
その光を浴びたディルの頬の腫れが、すうっと引いていった。

「はい、終わり」
ミネアの言葉と共に、両頬の灼けるような痛みが、嘘のように治まった。

「ミネアさん、回復呪文も‥‥？」
ぽかんとした顔で、ディルが言う。
「あら？　言ってなかったかしら」
「言ってなかったかしら、じゃないよ、まったく」
マーニャがぼやく。
「あんた、あたしのことはきっちり教えたくせして、自分のことは全然教えてない
　でしょ！　すっごく不公平だと思うんだけど！」
「あら、そうかしら‥‥姉さんは見かけに騙される人が多いから、ちゃんと説明して
　あげなきゃ、って思っただけよ。私はこの通り、すごく見かけ通りの女だけど」
「良く言うよ、まったく」

そんな姉妹のじゃれ合いを聞きながら、ディルはふと、さっきまで嵐が吹き荒れていた、通りの中央にへたり込んでいる三人に、目をやった。

「ミネアさん‥‥あの人たち‥‥」

心配そうな顔で、ディルは言った。
それを聞いたミネアは、ちょっとだけ苦笑して‥‥優しく言った。
「ディルは優しいのね‥‥あんな目に遭っても」
「えっ？」
「あの人たちが、憎くない？」
意外なミネアの問いかけだった。

ほんの少しの沈黙の後、ディルは答えた。
「憎くないっていえば、嘘になります‥‥でも、あれじゃ可哀想‥‥」

「それじゃ‥‥あの人たちが、あんなことをしない人になったら‥‥ディルは、あの人たちと友達になれそう？」
「えっ？」
またも、意外な問いかけだった。

「なるほどね‥‥やっぱり、そういうことね」
マーニャは、何かに気付いたようだった。

「多分‥‥なれます。なれると思います」
再び、やや間を置き、ディルは答えた。
そして、その後のミネアの言葉も、また意外なものだった。
「そう‥‥良かった。私のやったことは間違いじゃなかったわ」

＊

「‥‥？」
怪訝そうな顔で、ミネアの顔を見るディル。

「本当はこんな方法は使わないに越したことはないの。でも、しかたがなかったの‥‥彼らの心があまりにも醜過ぎたから。私にはこれしか出来なかった‥‥」
ミネアは、視線を落とした。
「一度、心を完全に壊してしまうことしか」

「これはね、ディル。ミネアの使う、本当に本当の奥の手なんだよ」
マーニャが、真剣な顔で言う。ミネアが続いた。
「そう‥‥私はあの時、本当にこれしかないと思ったの。彼らを人生の正しい道へ導くためには、完全に醜い心を壊してしまうことしか‥‥」
ミネアは、つらそうだった。
「破壊（ディストラクション）と再構築（リコンストラクション）‥‥一度完全に心を壊してしまって、もう一度、心を一から作り直す‥‥。幸い、彼らの親分のお爺さんがいい人そうだったから、再構築（リコンストラクション）は苦労しないだろう、って思ったの」
ディルは、きょとんとして聞いている。それを見たミネアは、少し話を変えた。

「もっと簡単に言うとね。これは、詐欺師(スウィンドラー)とかいんちき(フェイク)教祖なんかが使う『洗脳(ブレインウォッシュ)』
と同じ方法なの。あまり良いことではないわ‥‥でも、これしかないと思ったの」

「洗(ブレイン)‥‥脳(ウォッシュ)‥‥」
ディルが反芻する。
邪悪な響きだった。

「ディル‥‥ミネアは、あんたが知ってる通りの、本当に優しい娘なんだ。ずっと
一緒に生きてきたあたしが保証する」
マーニャが言う。
「あんたの恨みを晴らすだけじゃない、あいつらを真っ当な道に戻してあげたい‥‥
そう思って‥‥。好きで、あんなキツいやり方でやってるんじゃないんだ」

ミネアが自分で言えない気持ちを、マーニャは代弁したのだ。
それが自分の役目だ、と、マーニャは思った。

「この娘はそれができる‥‥あたしなら、怒って呪文で焼き尽くしちゃうところだけど、
この娘は、あいつらの先のことまでちゃんと考えてる‥‥それがこの娘の凄いところ
なんだよ」

「ミネアさん‥‥」
ディルは、悲しそうな、でも嬉しそうな、そんな複雑な表情で言った。
「あの‥‥ありがとうございます。あの人たちが憎くないといったら嘘になるけど‥‥
でも、あの人たち、可哀想だったから」

「ふふ‥‥ディルは凄いわ」
「えっ？」
「本当に、優しいんだもの‥‥あんなに強いのに」
「まったくだ」
マーニャが横から口を出す。
「あの複合攻撃、本当にビックリだよ‥‥あんなのを隠してたなんて、ずるいぞ！」
そう言いつつ、マーニャがディルの頭を、両腕でがしっと極め、締め上げた。
「いたたた！」
「こら姉さん、調子に乗り過ぎよ」
「はは‥‥ごめんごめん」

＊

「さて‥‥」
マーニャが、空を見上げる。
満月が、彼女達を照らしていた。
「さすがに眠いや‥‥すっかり酔いが覚めちゃったけど、もう飲み直す元気もないし、
　さっさと宿屋に帰って寝ようか」
「そうね、明日からまた旅に出るんだし」

再び歩き出す姉妹を、ディルは後ろから、ただ見つめていた。

月明かりに照らされた二人は、まるで美の女神のように見えた。

燃えさかる炎を心に宿した女炎術士（ファイア・ソーサレス）、マーニャ。
強き心を優しい微笑みに隠した女風使い（ウインドマスター）、ミネア。

星の数ほどの人間の中で、これほど美しく、これほど強い女性と会えたことを、そして何より、彼女達と旅を共にすることになった事を、ディルは心から喜ばしく思った。

「ディル、どうしたの？」
「早く来ないと、置いてっちゃうわよ！」
二人が同時に振り向き、声をかける。

「は、はーい！」
微笑んで、ディルは走り出した――。

世界を救うべき勇者、天空人混血児（セレスティアン・ハーフ）ディラジーナ。
導かれし者、コーミズのマーニャとミネア。

彼女達の旅は、まだ始まったばかりである‥‥。

（完）

‥‥おまけ。

「‥‥そーいえばミネア、あんたにひとつ、教えてもらってないことがあるんだけど」
「なあに？ 姉さん」
「宿を出る時、あんた、占いやってたよね。その５枚目‥‥最後の紙札(カード)が何だったのか、まだ教えてもらってないよ」
「５枚目‥‥ディルの『遠い未来』‥‥『結末』の紙札(カード)ね」

ミネアは、提げ鞄(ポーチ)から、紙札(カード)を１枚取り出した。

「ふふ‥‥これが彼女の『結末』。彼女が救うものよ」

その紙札(カード)に書かれていたのは、両手に魔杖(ワンド)を持った裸の女神が、「無限」を表す二重の輪の中に入っている‥‥そんな絵だった。

「ははは、ディルの救うもの、ね。こりゃいいや！ あんたの占いだ、絶対当るよ」
「だといいわね。ふふ」

そう言って、ミネアは、手に持った紙札(カード)‥‥「完成」「成功」を暗示する、大秘札(メジャーアルカナ)最高のラッキーカード‥‥＜世界(ザ・ワールド)＞を、大事そうに提げ鞄(ポーチ)にしまい、何事もなかったかのように、再び歩き出した。

（今度こそ本当に‥‥完）